様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２９ 日現在

機関番号：４３８０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３６０１０２８

研究課題名（和文）子どもにやさしい医療を創造するためのホスピタル・プレイに関する研究

研究課題名（英文）Study on Hospital-play to create a friendly medical care to children

研究代表者
松平　千佳（Chika, Matsudaira）

静岡県立大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：７０３１０９０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：海外調査で病児や被虐待児などを効果的に支援するセラピューテックな遊びに関する知識や技術を学び、日本のHPS教育、病児の在宅支援、児童相談所における協働事業に導入した。国際シンポジウム開催では病児や重度の障害児の遊びのニーズに関する理解が深まり、ワークショップ開催では小児医療に関わる様々な専門職の対話の場の提供や、HPSの包括的な学術領域の可視化ができたと考える。HPSの専門性を示すエビデンスとして発行してきた事例集は、HPSのキャリアラダーの形成にも役立ち、学び続ける専門職としてのありかたを示した。
科研費による研究は海外の研究会においても発表し日本におけるホスピタル・プレイの国際理解を深めた。

研究成果の概要（英文）：Through the research of Hospital Play and Play Therapy in US and and UK, the education of HPS in Japan has developed in to a further stage and also the knowledge and methods of the advanced countries has been used to help Japanese children in hospitals as well as for children’s who have been abused.By holding the international symposium of Hospital Play, many people who had no idea about sick children and their needs for play, have been enlightened. Hospital Play workshops have not just given new knowledge for the attenders but has been seen as providing a base for interaction, and multidisciplinary discussions has been deepened. Case study books as well as two books about Hospital Play have been publish which serves as evidence for this new profession.The results of research has been reported in academic societies in Japan as well as abroad, and international connections and understandings have
been deepened.

研究分野：Hospital playに関する分野、ｿｰｼｬﾙﾜｰｸに関する分野、家族の福祉に関する分野

キーワード：ホスピタル・プレイ　社会福祉　医療・福祉

１．研究開始当初の背景

報告する研究は、Hospital Play Specialist（以下ＨＰＳ）という新たな専門職にかかわる、教育と臨床の場における病児支援を総合的に促進するための、包括的な臨床研究である。ＨＰＳは、遊びを用いて、医療環境をチャイルドフレンドリーなものにし、病児や障害児の医療とのかかわりを肯定的なものにするため、小児医療チームの一員として働く専門職であり、その専門教育は１９６０年代に英国で形作られ、現在ではニュージーランド、オーストラリア、香港において国の文化や状況にあった養成が行われている。

日本では、２００７年に静岡県立大学短期大学部が、社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム「離退職保育・看護資格保有者のキャリアアップのための「HPS」養成教育プロジェクト」が文部科学省から採択されたことを受け、受託事業として HPS 養成を開始した。

２００９年には、新たに大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラムとして、「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発～病児・障害児に対する Family Centered Care 実現に向けた医療・福祉系短期大学の挑戦～」が文部科学省より採択され、他大学でも HPS 養成が可能となるよう、また、HPS 養成を小児医療に関わる者のキャリアラダーとして位置付けられるよう、教育学的な分析と構造を明確化するための取り組みが２０１１年３月まで行われた。分析に用いたのは修了生８９名の受講希望書、実習生調書、実習記録、実習課題のレポート、作成したプレイ・プログラム、取り組んだ事例研究などであり、これらの資料を、心理学、教育学、小児医学、小児看護学、デザイン学、美術学、児童福祉学、保育学、建築学を専攻する専門家とＨＰＳに分配し、キーワードを抽出するための分析作業を行った。HPS になりたい動機や学びの過程と結果が読み取れるこれらの貴重な教育的資料から、日本のＨＰＳに求められる知識、技術、態度を導き出す作業を再度行ったのである。導き出されたキーワードはおよそ３５０であった。

科研費に基づくＨＰＳの研究は、平成 23 年度に始まったが、当初はＨＰＳという専門職を日本に根付かせ、病児・障害児に特化した援助を展開するために、①学問としての基盤づくり、②諸外国の先進事例の取り込み、③日本国内におけるホスピタル・プレイの普及の必要性を強く感じていた。

２．研究の目的

上記したＨＰＳにかかわる研究や取り組みが行われる中、科研費を申請した研究の大目的は以下の３つであった。

１） 英国や北米にはすでに遊びをツールに病児を支援する専門職 HPS が小児医療チームの一員として定着しているが、それらの国における歴史的な発展過程を研究し、現在の取り組みを研究することにより、日本における現状とＨＰＳ定着に向けての課題を明らかにすること。

２） 理念なき実践は根付くわけがなく、病児（障がい児を含む）の療養環境を豊かにできる HPS を、日本の小児医療チームの一員として根付かせるためには、小児医療の理念として、Child and Family Centered Care に立脚する小児医療の在り方が必要となるので、その理念を研究すること。

３） 日本の小児医療従事者のケアや治療に対する意識を明らかにすることによって、子どもの Well-being から見た日本における小児医療の現状と課題を明らかにし、HPS 活動を浸透させる具体的な戦略を示すため、小児医療と福祉と環境を融合させた新領域を研究し、模索すること。

３．研究の方法

１） HPS をすでに定着させている先進国の事例を調査研究する。

２） HPS 先進国において関連組織を率いているリーダーに対するインタビューを行いナラティブなアプローチを通して、体験に基づく知を集めるとともに組織的な動向を調査する。
３） HPS 先進国において病児の支援を行っている HPS に対してインタビューを行い、その職能を明らかにするとともに、小児医療チームの編成について分析する。
４） Children-Family Centered Care の理念とその理念に基づき小児医療を提供している先進病院を調査する。
５） 日本で活躍する HPS と発達、心理、精神医学、小児医学、そして建築学などの専門家と研究会を重ね、対話を通して子どもの Well-being と小児医療の融合に関する課題を見出す。

４．研究成果
１）海外における調査
①平成 24 年 3 月 12 日～平成 24 年 3 月 19 日に、米国・シカゴにあるセラプレイ協会に研修に行き、親と子どものアタッチメントを遊びを通して評価分析し、遊びを通して強化するために開発された Theraplay Training を受けるとともに、愛着に課題のある子どもに対する専門的な支援方法のありかたを研究した。この成果を、日本の HPS 教育および母子分離をする病児に対する支援につなげていった。

②平成 25 年 3 月 5 日～平成 25 年 3 月 11 日に開催された、39th Annual International Conference The Association for the Study of Play (TASP),26th Conference The American Association for the Child ’s Right to Play（IPAUSA）の合同研究大会に参加し、日本における病児の遊びに関する認識について、ホスピタル・プレイの視点から研究発表を行った。この研究大会には、全米のみならず近隣国からも遊びを研究する研究者が集まっており、教育学、文化人類学、あるいは心理学の専門家と学際的な討議を行うことができた。

③平成 25 年 6 月 3 日～平成 25 年 6 月 10 日の英国・ロンドンの研修において、１９７０年代に活躍した初期のＨＰＳに対するインタビューを行った。Hospital Play の発達史を調査研究する中で、これらの先人たちの強いコミットメントが現在のＨＰＳの発展を支えていることを改めて確認することができたとともに、時代の変化にかかわらず守らなければならないホスピタル・プレイの理念や価値があることを強く認識することとなった。

④平成 27 年 3 月 13 日～平成 27 年 3 月 22 日に、米国・イリノイ州・シダーフォールズに研修に行き、アドラー派プレイセラピーの集中講義に参加した。この集中講義に参加している米国のカウンセラーやソーシャルワーカーとの意見交換を通して、被虐待児に対する支援の共通する課題を見出すことができた。トレーニングの成果は、HPS 養成教育、および静岡市児童相談所との協働事業である被虐待児童支援に応用している。

また、平成 21 年度より毎年 2 月に、ホスピタル・プレイ国際シンポジウムを開催し、海外の先進事例を広く社会に対して紹介しながら日本国内の普及に努めている。平成２５年からは静岡に全国から１００名を超える参加者が集い、病児に対する支援の対話の場となっている。

２）日本における小児医療従事者の意識と変化
本学社会人専門講座 HPS 養成講座を修了したＨＰＳを講師として招聘し、病棟で働く保育士などを対象に、「保育士のためのホスピ

タル・プレイ・ワークショップ」を開催した（第 1 回目：平成 25 年 6 月 29 日、7 月 28 日、10 月 27 日、第 2 回目：平成 26 年 8 月 2 日、8 月 10 日）。どちらも 30 名ほどの参加者が集い、「導入編　プレイ（遊び）とは何か-子どもと遊び、大人と遊び-」「実践編　プレイの力を体験する-プレイの実際-」「応用編 病院における遊びの展開-ホスピタル・プレイの実際-」をテーマに学んだ。

事後に回収したアンケートによると、このような実践的な学びを提供するワークショップは少なく、有意義な学習の場を提供していることが分かった。また、受講生同士の出会いやつながりを形成する場にもなっており、この点も評価されている。今後も、ホスピタル・プレイにかかわるワークショップを開催することにより、ホスピタル・プレイの普及に努めていく。

１）、２）であげた国際シンポジウムや国際ワークショップは、関係者のみならず、一般市民においても開催を重ねる毎に参加者数は増加している。特に、本学社会人専門講座 HPS 養成講座を修了した HPS にとっては、研究発表の場となっている。

３）新領域の開発

①事例集の発行

平成 23 年より毎年、修了生によるホスピタル・プレイ実践を集めた事例集を発行している。平成 26 年度には第 5 号を発行し、12 編のホスピタル・プレイ実践が収録されている。このような事例の積み上げこそが、ホスピタル・プレイの力を証明するエビデンスになると考えている。

②書籍の発行

松平千佳　他、株式会社建帛社、ホスピタル・プレイ入門、2010、176

松平千佳　他、株式会社創碧者、実践ホスピタル・プレイ、2012、227

松平千佳、日総研出版、プレイ・プレパレーション導入・実践の手引き、2014、126

③ブロックごとの定例研究会の発足

本学が実施している社会人専門講座 HPS 養成講座の修了生は、卒後教育のために、静岡・名古屋・関東・関西のブロックごとに定期的に定例会や勉強会を行い、事例の報告を行う研究の場を形成している。このような専門家の集まりにおける聞き取りの内容から、ＨＰＳが確実に成長発展していることがうかがえる。

ＨＰＳ養成を諸領域間の「対話」を通した「（認識）枠組み」の共有に位置付けて考えた場合に、新たな可能性が生まれてくることに気づかされる。１つが、諸価値の相互評価の可能性である。例を示すと、ＨＰＳ養成講座では主に、保育士と看護師が学ぶ場となっている（図 1）。彼らはこれまで自分が帰属してきた社会の価値観を他領域との対話によって練り直す場面が多々ある。２つ目が、人間に関する研究を進めることができる点である。医療でもなければ保育でもなく、あるいは教育からでもない、主人公である人間（子ども）に焦点を当て、その対象をとらえる枠組みを再構築していくという活動が生まれる。３つ目は、社会のオピニオンの形成に対して、影響を与えることができることである。ＨＰＳを養成する行為や、ＨＰＳとしての働きは子どもとその家族、または家族会などに影響を与える。また、研究会や学会などで発表することにより、子どもに関心を持つ多くの人々の目に触れることとなる。

その結果、病気の子どもに対するケアについて社会のオピニオンの形成に影響を与えることができる。これらの可能性は、ＨＰＳ養成が果たす社会への貢献に他ならない。

ＨＰＳにかかわる包括的な研究や実践の取り組みの中で、子どもにやさしい小児医療を実現する HPS の養成教育は、平成 24 年度

に実施された独立行政法人日本学術振興会の調査の結果、特に優れており波及効果があると認められた。また、平成 25 年度文部科学省の「大学における特色ある教育事例の把握等に関する研究調査」において全国 42 大学の特色ある教育事例として選出されるなどの評価をされている。今後も、ホスピタル・プレイにかかわる臨床的研究を包括的に推進し、学・産・民・公と連携し、発信したいと考えている。

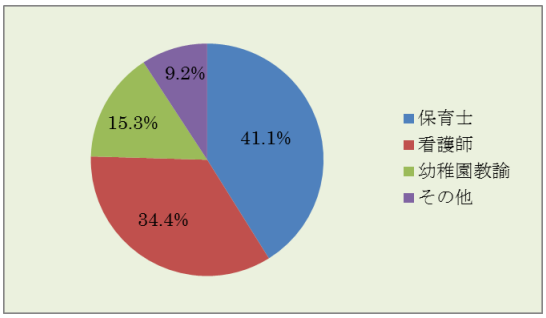

図 1　HPS 養成講座受講者の保有資格（複数回答）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 9 件）

①松平千佳、中山陽子、病児とそのきょうだい及び母親に対する HPS の支援-脳腫瘍を発症した男児の事例を通して-、こども環境学研究、査読有、7 巻 3 号、2011、53-57

②松平千佳、岡田節子、森裕樹、ホスピタル・プレイ・スペシャリストによる脊髄性筋萎縮症児への在宅支援、訪問看護と介護、査読有、17 巻 3 号、2012、240-245

③松平千佳、森裕樹、Hospital Play Specialist の役割と目的～子どもの命を輝かせる遊びの必要性～、癒しの環境、査読有、Vol.19　No.2＋Vol.19　No.3、2014、59-60

〔学会発表〕（計 23 件）

①松平千佳、How play can support children with chronic illness、39th Annual International Conference The Association for the Study of Play (TASP),26th Conference The American Association for the Child's Right to Play (IPA/USA)、2013.3.7、アメリカ

②松平千佳、Hospital play in Japan. Past, now and the future、7th Biennial International Hospital Play Specialists' Association of Aotearoa/New Zealand Conference、2014.3.21～2014.3.23、ニュージーランド

③松平千佳、後藤和恵、侵襲性の高い処置を受ける子どもに対するホスピタル・プレイのワークショップ、7th Biennial International Hospital Play Specialists' Association of Aotearoa/New Zealand Conference、2014.3.21～2014.3.23、ニュージーランド

④松平千佳、大矢佳代、望月ます美、後藤和恵、Seminars hernimi specialistkami z Japonska、12. zari 2014, Narodni technicka knihovna, 、2014.9.15、プラハ

〔図書〕（計 2 件）

①松平千佳　他、株式会社創碧者、実践ホスピタル・プレイ、2012、227

②松平千佳、日総研出版、プレイ・プレパレーション導入・実践の手引き、2014、126

〔その他〕

ホームページ等

http://bambi.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html

６．研究組織

(1) 研究代表者

松平　千佳（Matsudaira,Chika）
静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科
准教授
研究者番号：70310901